

2020年8月9日
聖霊降臨節第11主日

家庭礼拝のための
聖書・牧会祈禱・メッセージ



【 聖 書 】

ローマの信徒への手紙 14章7節～9節（新約聖書 294頁）

【牧会祈禱】

命の源である神様

私たちが祈りへと導いてくださってありがとうございます。私たちは祈らなければならないときに、祈りから離れ、あなたを信頼しなければならないときに、意地を張ります。主に愛されているにもかかわらず、貧しい生き方をしてきた私たちをどうかお赦してください。世の騒がしさから離れ、祈りの静けさの中で、あなたの御声を聞かせてください。

世界ではあちこちで争いが起こっています。民族や宗教、住む場所、政治的立場、病が人を分断しています。新しい困難が世界を覆う今こそ、共に生きる方法を考えなければならないのに、自分と違う者は異質だとして排除しようとしています。神様どうか、この地にあなたの平和を立ててください。病を癒やしてください。争いで疲弊している人々を助けてください。

私たちの友の中に、病気の治療をしている人がいます。家族も心を砕いて祈っておられます。心身の衰えを感じている人、それによって自信を失っている人がいます。一日を平安に過ごすことが難しい人がいます。神様の支えが必要な人たちばかりです。どうか、私たちが心配している全ての人に神様の励ましと導きを与えられますように。

今日の礼拝後には定例役員会が行われます。役員ひとりひとりを聖霊で満たし、神様を中心とする話し合いをすることができますように。軽井沢教会がこの地域でキリストを証できるよう、必要なことを決めさせてください。また教会を形作るすべての信徒、そしてそこに仕える牧師が、主の宮となれますように。

このお祈りを主イエス・キリストのお名前を通して御前におささげいたします。アーメン。

【メッセージ】

ローマの信徒への手紙を読み進めてきてパウロという人がいかに優しい人であるかを知りました。パウロは民族、年齢、身分の違い、出来不出来で人を分けません。誰と出会っても、誰に手紙を書いても、この人のためにイエス・キリストが死んで復活してくださ

たと本気で考えているのです。パウロの優しとはその信仰に基づく優しさです。

パウロがそう考えるためには、一度自分を捨てなければなりません。この時代に生きたユダヤ人にとって神とは、自分たちだけを祝福する神でした。

その神が律法を与えてくださったのですから、律法に従って生きることは、神の民である証でした。しかし、パウロは律法による誇りは取り除かれたと言います。ユダヤ人であること、民族の歴史、自分は神の民だという自己認識。それらを一度捨てるというのは、並大抵ではありません。神の民だという自己認識がなければ、彼は小さな民族出身の、時代遅れの慣習に縛られた、名も無き人にしかすぎません。

それは私たちが肩書きを失ったときと似ているかもしれませぬ。ある会社で、ある組織で、立派な役職をしている。誰その夫である、妻である。成果を残してきた人間である。それら肩書きを失うのは、自分が揺らぐような不安を起こさせます。神様が頼りと言いながら、実際は肩書きをよりどころにしていたから。しかし、私たちに肩書きがなくても、神は私たちを愛してくださいませ。私たちがなにひとつ為し得ていなくても、神は独り子を十字架につけてくださる。そこがパウロの出発点なのです。

肩書きや条件がないなら、神様との繋がりはどこから生まれるのでしょうか。ただ信じるだけです。他は何もありません。それだけで私たちは救われるのです。自分のこれからを変えられますし、信じるだけで自分が重ねてきてしまった過去さえ変えていただくことができるのです。許されるはずのない過去が、赦された過去になる。私たちはそんな破格の恵みをいただいているのです。

しかし、なお私たちは苦しんでいます。信じるだけで主の愛を受けられるはずなのに、どうして私たちに今なお命さえも脅かす衝動があるのでしょうか。

インドで貧しい人々のために仕えたマザーテレサさえ、そのような衝動があったと言われています。マザーテレサが死んでから初めて公開された手紙には、奉仕

生活のほとんどの期間、神の愛を、時には神の存在さえ疑うような暗闇を耐えていたことが書かれています。愛が徒労に終わり、無意味なことに魂を削られる。それらが自分がむしばむ経験を私たちもしてきました。しかし、マザーテレサは神に仕えることから逃げ出さませんでした。どうしてそのようなことができたのでしょうか。彼女の手紙には「朝4時ごろと夕方8時頃のミサが活力の源」だったと書いてあります。答えは簡単です。彼女を支えたのは神の言葉でした。礼拝で自分のよこしまな言葉ではなく、隣人の嘆きや批判ではなく、主の言葉を聞く一カトリックですから、聖餐によって御言葉を我が身にいただく—それが主のために生きる、活力の源であったのです。

命を自分のためだけに消費するのだとしたら、人生は空しいものです。ある時点が来たら終わるだけですから。また、無意味に死ぬならば、わたしという存在が大切だとどうして思うことができるのでしょうか。しかし、生も死にも意味があります。これは主があなたを利用するものではありませんし、殉教を強制するものではありません。あなたの生と死は誰よりもあなたを愛する主のものなのです。主はあなた生を決して無意味にはしない。あなたの死さえ無意味にしない、と言ってくださいませ。

そのような愛から、私たちを離れさせるものはないとパウロは断言します。どんな過去も、どんな脅威も、神の愛から引き離すことはできません。あなたはその生も、死さえも主のものなのですから。

信じるのみ、です。あなたが神を知る前から、神はあなたを知っています。あなたは過去も含めたそのまま、神が命をかけるほどに救いたいと願った人です。あなたの生も死もわたしがその意味となると神が言うてくださるほど、あなたは愛されているのです。